

第四回香川菊池寛賞受賞作品

誕生日小景

門脇 照男

「夜、みなど、私の誕生日の食卓につく。誕生日といつても、下の菓子屋で買ってきたデコレーションケーキに小さな蠟燭をつけただけのことだ。妻からはカッターシャツのプレゼントをもらう」
Eという作家の随筆風な小説を読んでいる、沼田はこんな一説に出くわした。夜、もう二時に近い。妻は階下で、息子は彼の隣の部屋で眠っている。息子はさつきから、なにか謔言のようなことを言っている。それが襖を隔てた息子の部屋から聞こえてくる。よく寝言を言うくせがあるのだ。彼はそれを気にしながら

Eの小説を読んでいた。
彼は活字から目を離し、机の上にはぼんやりと目を落した。

雑然とした机の上には、ふんぎりの悪い自分の性情や生活がある、と彼は思う。不用なものを、その時は唯一の宝みたいに持ちこんで、それを取り去るのが億劫なのだ。一度手にしたものには幾らかの愛着もある。そのような生活の惰性の中に、沼田は、怠惰で張りのないと自分でも思う、そんな生活をすごしている。

Eという作家は、たしか彼と同年の筈だった。今では流行作家といつてもいい。時折、生活を観照した、地味だが光沢のあるいい短篇を発表する。彼の好きな作家の一人なのだ。

誕生日ということだが、その時沼田の心に残った。そうか、もう四十二才になるのか、と彼は今更のように自分の年令を思った。

彼は机の上に置いてある小さな手帳を取り上げ、パラパラとページを繰った。十一月×日、木曜日となっている。××

の日とか季節のメモなども、その日にはない。彼は鉛筆を抜き取って、その日の空欄に、誕生日と薄い字で記入した。もうそれは二日後のことなのだ。うっかりしていた。自分でも忘れるところだった。

沼田は、それほど忙しい毎日を送っているということはない。どちらかといえば、暇が多いとっていい。そのくせ、いつもひっそりと何かに追われているような、妙にいらだたしい気持ちに陥る。

五年ほど前、彼が希望して夜間の定時制高校に勤めるようになってからそうだ。それまで沼田は、県下でも名のある普通科の高校に勤め、仕事熱心な彼は、或る意味では教育者として囑望されていたといえる。その彼が、突然のように辺鄙な山間にある定時制の分校勤めを

希望したのだ。そんな或る日、かれは校長に自室へ呼ばれた。

校長は彼と同じ大学の先輩で、若い頃は藤村の小説に心酔し、自分でも書いたことのある文学青年だった。そんな校長に、沼田は心の底で親密なものを感じながら、校長という権威めいたもの前に、いわれのない一種の抵抗、気おくれのようなものも覚えている。

校長は、自分の机の前に肩を落して直立している彼の顔を、黙ってしばらく眺めていた。彼は息苦しくなって口を開こうとした。その時、「君の希望も、わからないことではないが」とひとこと言っ、ポケットからタバコを取り出し、ゆっくり口にくわえてライターの音を立てた。

彼は校長の炯眼で、自分の腹の底まで見透かされたような後めたさを覚えた。「君は、自分で、自分を狭く苦しい所へ

追い込もうとしているようだ」

「……」

彼は咄嗟の場合、何と言っているかわからなかった。好意的なことばが、沼田の心の痛みとなって突きささった。

自分で自分を……、その通りかも知れぬ、と彼は思った。彼はそれまでに、いくら小説めいたものを書いてはきたが、それでどうなるというものでもなかった。みじめな内心の独白じみて、日の当る所へだせば色褪せて見えたり、すぐ萎れてしまいそうであった。が、趣味というには、彼の場合それは当たっていないかも知れない。

「くだらん趣味ですよ」と人に言いながら、彼は心の底で、およそ趣味とは異質な、もつと内心の要求を感じているのだと自分でも思い、そんな自分を納得させてもいた。定時制の勤務を希望したのも、そんな内心の要求にすなおに従いたい

からだだった。小説なんか、と思いついて捨てることも出来ず、かつてのEのよい背水の陣を敷くだけの決意もなく、ふんぎりの悪い生活の中で、ずるずると深みに落ちてゆく、そんな感じだった。自分で自分を苦しい所へ追い込もうとしている、と好意的に言えばそうだ……。

定時制の勤務には時間的なゆとりがある、ということが沼田の場合何よりの魅力だった。それに良心？の痛みも少なくてすむ。が教育者としての自分はどうなのか、と沼田は考え込まずにはいられなかった。悪いことである筈はなかった。墮落だとも思わなかった。単なる営利や打算ではないのである。定時制の教育に特別な情熱を持つということではないが、自分のことに情熱を持たない人間が、他人のことに情熱を持つことが出来るだろうか、と彼はひそかに呟いてみたかった。しかしそれは、多分に、ふんぎり

の悪い自分の性情や立場を自分なりに弁護する口実でしかないようだった。沼田自身釈然とした訳ではない。校長の立場として、そんな沼田に忠告を与え、一考の余地を残してくれたことに、彼は感謝しなければならなかった。本心はどうあろうと、沼田のそれまでの実績や立場として、それは確かに後退といえなくはなかった。世間の常識ではそうだ。定時制教育の振興はお題目のように叫ばれながら、日の当らぬ存在であることに変わりはなく、野球でいえば二軍というところだ。陰湿な一種の弛緩した風土がそこにはある。

時間的にゆとりはあろうが、変則な夜の勤務も決して楽なものではない筈だ。それは分っている。が、彼の個人的なそんな立場とは別に、さまざまな家庭の不如意や職場の臭いをもって集まってくる生徒たちに、彼は無性に親近感を覚え

る。輝かしい桧舞台よりは、場末の陰気な芝居小屋が好きだ。日の当らぬ所で、ひっそりと、そのくせ懸命に生きようとしている草木が好きだ、と沼田は思う。そんな偏狭な退嬰な気持ちに彼にはある。

彼は校長の前で、そんな錯雑した自分の気持ちをすなおに吐露し、聞いてもらいたかった。が、自分のまずい小説を読まれる時以上の羞恥を覚えて、そんなことは切り出せない。

「何となく、自分のがらに合っている、そんな気がしまして……」と彼は、弁解がましくことばを濁した。

その夜、彼は妻と口論した。

「そんな重大なこと、どうしてわたしに、相談してくれなかったの」

妻は露骨に、彼に対して感情を投げつけてきた。それは、彼の立場に立ち入って、共に考えようとする態度ではなかつ

た。

「昼ごろごろしていて、夜出ていくのね、みつともないつたらありやしない。」

「すまない」と彼は妻の前であやまった。

何であやまる必要があるんだ、と鬱勃とした感情を抱きながら、彼はいつもあやまってしまう。もうこうなったら正當な理論の世界ではないのだ、と思ってしまう。女の前であやまることは男子の恥辱だ、とも思わない。とりとめもなく柔軟で、ふたしかな彼の心だった。この場合も、相談したくないと思ったのではない。みすみす妻を怒らせるようなことは、切り出しにくい。そんな気持ちの中で、ぐずぐずと日を過していた。それはやはり、迂濶なことだった。

「いつもそれよ。二たことめにはあやまったり、ごまかしたりして、自分だけで勝手なことするんだから、バカにしてるのよ、わたしを」

その夜の妻は、子供の前でも手放しの号泣で、手に負えなかった。

バカにしている、という気持は少しもないのだが、そう言われてみるとそうかも知れなかった。それより沼田は、そんなとめどもない彼の心の核に、触れ得ないまでも、触れようとする妻のことばが欲しかった。

彼はしばらく妻の枕元に病状を案じる付添人のように坐り、薄い明りの中で泣きじやくるそんな妻の顔を、ぼんやりと眺めていた。この手でこれまで、妻をいくら泣かせてきたことか……と彼は思った。

そんな時沼田には、いつも思い浮ぶ、一つの顔があった。**新井俊三**という男の顔だ。彼はその男の顔を一度見たことがある。もう七、八年も前のことだ。

教科別の中高連絡協議会が県教委の主催で催され、彼は高校の英語部会から

選ばれてその会に出席した。コの字型に並べられたテーブルについて、自己紹介をした。中学五人、高校五人、それぞれに県教委からの司会者が一人いた。

「×中学の新井俊三です」と名前も入れて、張りのある声で言った時、彼は、はすかいにいたその男の顔を愕いて見た。

彼と同年輩かと思われるその男は、会の始まる前から、一際目立った存在だった。饒舌というのではないが、一重瞼のよく動く目の色をして誰とも気さくに談笑していた。芸術家のような長髪をきれいに分け、色白だが筋肉質で鼻梁が秀でていた。小ざかしく抜け目のない男の顔だ、と沼田はその時そう思った。沼田の特別な感情が、その時その男の顔に貼りついた。侮蔑というよりは、嫉妬に似た感情だった。

彼は妻と結婚して、間もなく、中学で

英語の教師をしているという新井のことを聞いた記憶がある。誰から、いつ、というのでもなく、それはごく自然に彼の耳に入ったような気がする。適当な仲人を立て、新井は妻と結婚する筈だった。それが駄目になった経緯を彼は知らない。妻に糺したこともない。が、二人がかなりの交渉を持っていたことは事実のようだ。今も妻は、彼がひそかに新井の顔を思い浮べるように、新井とこのことを思い起すことがあるのだろうか。彼に不満をぶちまけて泣いている時、妻の心の中に、新井の倅がないとはいえない。

彼も、もし、くたびれためんどりのような顔をした妻と結婚しなかったら、と思うことはしばしばなのだ。よいにしろ悪いにしろ、沼田の生活は今とは変っていたに違いない。女にとって以上にそれは、男にとって微妙な作用を及ぼすもの

だ、と彼には思える。昼は寝たり起きたりごろごろしていて、妻とことばを交わすことも少ない。日が半分傾きはじめて頃、ふと用事を思い出したうつけ者のような顔付きで、そそくさとバスに乗って学校へ行く。夜の九時、漫然と、おもしろくもない授業を終えて帰路につく。人けのない山道を停留所まで自転車走らせ、そこからバスに乗って三十分。帰れば十時を過ぎている。その頃息子は、もう眠っている。息子と一緒に夕食をとるのは、日曜日位のものだ。夜の遅い彼は、朝も息子の顔を見ないことの方が多し。そして夜、鼻のような顔付きで、机の前に坐っている。机の上に、乱雑に埃にまみれた器物を載せて、ぼんやりと目を落としたりとめもないことを考えている。が、今では、これ以上のどんな生活も自分のものだとは思えない。くたびれた顔をした四十女と、一つ屋根の下で、

十才になる息子を中に、お互に相手の心を付度しながら、その日その日を、そう不幸でもなく幸福でもない気持で送っている。そんなのが、やはり自分のがらに合った生活だと、沼田には思える。

彼は十八年前、妻と結婚した日のことを、昨日のことのように思い出す。彼は二十四才で、妻は二十一才の若さだった。学生時代テニスの選手をしていたという妻の肢体はのびやかで、弾んだゴムまじりのように快活だった。男を責めてなきじゃくるような女にしたのは何なのだろう、と彼は思う。

彼も妻も、誕生日などということを殊更口にしたこともない。それでいいのだ、と彼も思っている。都会風なセンスをひけらかしたくはない、という依怙地な思いが彼にはある。が、子供は違う。「今日は、**○○**ちゃんの誕生日やった」と、時に彼の帰りを待っていた息子が言う

ことがある。子供の学校では、先生がそれを一覧表にしている、毎月何人かある子供の誕生日に、「今日は○○ちゃんのお誕生日よ。おめでとう」と言つて、○○ちゃんの胸に赤い造花のバラを飾り、一緒に給食を食べるのだという。彼はそれをほほえましい気持になつて聞いている。赤い造花のバラを飾つた○○ちゃんを、クラスの子供たちは、幼い心の中で祝福しているに違いない。誕生日というものの持つ意味の大きさを、それぞれの心に、さまざまな色彩でいろどるのだろう。

沼田の幼い時、そうではなかった。誕生日などということは、学校でも家庭でも無関心で、彼自身意識した記憶はない。それは彼の育つた田舎町の、くすんだ街並みや、父母の確執に明け暮れた彼の家の陰微さのようにそうだったのか、と今の彼は思う。が、それは、その当時の日

本という国のありようでもあったのだろうか。大事のために生命を惜しみもなく捨てることを美德とした異常な季節においては、個人の誕生日など、さして意味のないものであったのか。彼は結婚するまで、長い間自分の誕生日が十一月×日であることを忘れてすごした。

「これ、あなたに似合うかしら？」と妻が言つて、長方形の小箱を差し出した時、彼はちよつと驚いた。琥珀色の渋い包装紙の上に、紅白の飾り紐が掛けられている。中から彼のネクタイが出てきた。

「何だつて、もつたいぶるんだ」と彼は言つた。

「誕生日よ、あなたの」

妻はその日まで、そんな小さな企みをひたくしにしている、自分の誕生日すら彼が気付いていなかったことに、小さな喜びの声をあげた。

結婚後はじめての、彼の誕生日のこと

だ。

「知らなかった」と彼は言った。

「いいわ、あなたのこととは、わたしがみんな憶えていてあげる」

二人はその夜、妻が作った誕生日祝の料理を食べ、妻の買ってきた小さなバスデーケーキを切って、赤いローソクに火をともした。

「私は三月×日、まだ大分間があるけど、憶えといてね、きつとよ」と妻が言った。二人は、ぎこちなく小指をからめて指切りをした。

その日を、彼はすっかり忘れていた。

三月×日の夜、妻は夕食の前に、みじめな顔付きになって泣いた。

「すまない」と彼は言った。

それは、本当にすまないと思ったのではない。それを忘れていたぐらいのことで涙を流す女というものが不思議で、はがゆく、いとしい気持もあった。彼はそ

れまでの生活の中では想像もできない、毀れやすい器物のようにそれは思えた。彼は、妻の心をなごめるために、口先だけで「すまない」と言ったような気がする。そしてそれは、今も大同小異そうなのだ。

妻は自分の誕生日のために、二人前のチキンライスを作っていた。二人は黙って、気まずい思いでそれを食べた。彼の時にしたように、ケーキを切り、赤いローソクに火をともしこともなかった。買いにいけば、それはいくらでもあるのだが、気まずくなってしまった二人にはどちらからもそんなことができなかった。いつの頃からか沼田は、妻との生活が、喜びというよりは、厄介だと思うことの方が多くなった。彼が、夜の勤めに出るようになってからかも知れない。共同で、何か意味のあることをしよう、という気を失った。それは意識してそうなっ

たのではない。彼は、遅い夕食が終ると、早々に二階の部屋に閉じこもって、原稿用紙を広げる。彼の帰りを待つ長い夜の時間、そして遅い夕食のあと、話し相手を失った妻はむやみに子供を叱りつけ、宵の口から床に入ったりした。彼は、何かの代償のようにそうなったのか、そうなったことが何かの代償めいてきたのか、今となってはわからない。もし自分が、他の女と結婚していたらどうなのだろう……と沼田は、時に思ってみる。が、彼は妻以外の女を知らない。他の女の心に立ち入ったことがない。小説など書いているから、観念的に憶測はするが、現実に女というものを知ってはいない。欲求がない、といえば嘘になる。が、本当に女を知るといふことはどういふことなのだろう。彼の場合妻という女をわかったと思うまでには十年の日子を要したのである。そして、本当にわかった

とは思えない。現実に、他の女に深入りすることをためらうものがある。厄介だな、と一口に言えばそうだ。日常の煩わしい人間関係をこれ以上ふやしたくない、という退嬰的な気持ちからだ。小心で頑な沼田の性情が、そうさせているのかも知れぬ。

沼田の心に、妻でない一人の女の姿が浮ぶ。姿は浮ぶが、彼女と深入りしようとは思わぬ。依怙地になって、そんな妄想を退ける。

「好きな人のところへ行けばいいのよ」と泣きながら妻が言う時、「わたしもその方がせいせいする」という妻の息をかき取る姿勢になりながら、沼田は、やはり妻の悲しみの深さを読みとつてしまふ。

誕生日ということをしたこともなく、ましてプレゼントなどというキザなまねは、もう二人の間にはなくなつた。

瘠せためんどりのような顔になった妻は、今は息子のことに異様な情熱をかけている。彼に充たされなかつた期待を、十才の息子に求めようとする。それだけが生き甲斐みたい……。沼田は、本当に妻を不幸にしているのだろうか、と考える。故意に不幸にしようと思つたことはない。二人の間に真剣に別れ話の出たこともない……。それだけは確かなことなのだ、と彼は、弁解じみた公式を自分に言つてきかせながら、妻を責めることのできない自分の弱さを感じている。

沼田は、Eの小説を押しやつてタバコに火をつけ、相変わらず机の上にぼんやりと目を落していた。

晩年の父が使つていた、妙に凝つた旧式の電気スタンドが、淡い橙色の光を投げている。灰皿、湯飲み、コーヒ一の缶、

喫茶店のマツチの箱、ライターや時計や、老眼鏡や虫めがね、手帳やノートの切れはし……。数え上げれば際限のない雑多なものが、机の上を占めている。机の上は物置場のようだ。彼はここ一年ほど、何もまとまつたものは書いてはいない。書きたくないと思うのではない。書くことにも積極的になれないのだ。五年ほど前定時制勤務を希望した時のような、書くことへの激しい渴望はいつの間にかなくなつた、と彼は自分でもそう思う。書く時間は十分ある。が、一種の弛緩した風土の中で、彼は徐々に、何か自分にとつて大切なものが擦りへつてゆくような気がしている。何か説明のできないあせりが、ひっそりと彼の体をとりまいてくる。いつの間にか、愛とか、青春とかいうことばを口にすることも憚られるような年になつてしまつた……。そんなふんぎりの悪い思い

の中で、沼田は、気が向けば夜遅くまで、机に向うこともある。何かを書いてみよう、と、悲愴な焦りに似た気持ちになる。が、思考は低迷し、焦点は定まらず、何時間もかかって一枚の原稿用紙も埋めることができない。そんなことが多くなつた。彼はそんな時、もう書くことは諦めた気持ちになり、自分の心をいたわるように、手元にある雑誌を漫然と拾い読みする――。

息子が、また何か譎言を言っている。母親に叱られたことにまだ腹を立て、夢の中で、何かとやり返しているのかも知れぬ。

階下で眠っている妻の、しぼんだ顔付きが浮んでくる。妻のたるんだ瞼の下には、涙のあとが、薄いかわを貼りつけたみたいにごびりついているに違いない。今夜も妻は、彼と口論して、涙を流しながら眠つたのだつた。

学校から、息子の帰りが遅かつたのだ。息子は、夏休みの宿題で提出しておいた「虫の鳴き方と鳴く時間」という研究が、学校代表の二名の中に選ばれて、郡市内ブロックの学童科学体験発表会に出ることになり、その練習のために遅くなることを、彼は二、三日前に息子から聞いていた。蟬やバッタなど、虫の採集からその研究のあらましは、殆ど妻の手になるものだった。

「ぼく、いやだな」と、その時息子が言った。

「母さんに言わなくていい」「それはいけない」と彼は慌てて言った。が、子供だって、本気でそう言っているのではない。息子は渋りながら「どちらでもいい」と言った。

それを妻に言つてなかつた。言わないでおこう、と思つたのではない。また明日……思っているうちに忘れていた。

その夜、彼の帰りは遅かった。十一時を過ぎていた。今夜のことだ。三村と酒を飲んでいて遅くなった。

妻は、日が暮れても帰らない息子にやきもきし、近所のタバコ屋へ走って学校へ電話した。今学校を出た、ということだった。が、家の人にもつて知らせておくように、子供には十分念を押しておいた筈だが、と理科主任だというその男教師は、学校の方には非がなかったことをくどくどと説明した。妻は、みすみす息子を不利な立場に追いやったことになる。

夜の道を、足取りも軽く帰った息子は、時ならぬ母親の剣幕に恐れをなした。激しいことばのやり取りの末息子は泣き出し、「あんな研究なんか、誰がしてくれと言った」と、本心でもないことをわめき出し、母親はくやしさに、顔をひきつけて息子を打った。息子は夕食もと

らずに寝てしまった。そして、それが彼の責任だと分った時、妻は、まだ帰らない彼に腹を立てていた。

妻がくどくどと彼を責めた時、まだ酔いの残っていた彼は「何だ、それぐらいのことだ！」と高飛車に妻を叱りつけ、やがて激しい口論になった。子供の意思を無視して、参考書を丸写しにさせているのを見た時、彼が妻に注意したことまで新しく持ち出して、彼の態度を責めた。そのあげく妻が泣き出し、彼は酔いからさめたように「すまない」と低く言った。「今日だけのことじゃないわ、いつだって、わたしに協力してくれたことがあるの、何もかも言ってくれたことがあるの、バカにしてるのよ、どうでもいいと思ってるのよ、わたしなんか。今までだって、随分がまんしてるんじゃないの。何もかもあべこべみたいなの、こんな生活もういや！」

そこで妻が泣き出した。まるで子供のように、すぐ感情を投げつけてくる。彼はそんな妻に取り合わず、邪険な気持で二階の部屋へ入ったのだ。が、こんな時、彼の左の胸は、十円銅貨を貼りつけた位の部分が、奥の方で微かに疼いた。それはいつものことだ。

「心配したのよ、随分」と言えればいい。

「うん、これからは気をつけなくちゃね」と彼も言い、二人は握手しないまでも、微笑み合つて一つの床に入るかも知れぬ。それをそうさせないものは何なのか。何がどこで、どう齟齬をきたしてしまつたのか……。

机の前に坐つたが、何もする気になれなかつた。二時間位タバコをふかし、ぼんやりと、とりとめもないことを考えていた。そして、そこにあつた雑誌を開いた。意味もなく、そんな自分の心をいたわるように……。読みたいと思つてそ

のままになつていたEの小説が、そこにあつた。彼は、読むともなしにそれを読んでいた――。

「誕生日か……もう、あさつてのことだ……」

彼は口の中で低く呟き、立てつづけに吸つていたタバコを灰皿の縁でもみ消し、便所に行こうと立ち上がった。その時少しふらついた。気が滅入つていたので、わざとよろける姿勢になつた。

「もう、長くはないな」

自嘲まじりに言つた三村のことばが浮んでくる。ほんとうに、もう長くはないのかも知れぬ、と沼田は思う。左の胸は、なぜか、まだジクジクと痛んでいる。

高校で音楽の教師をしている三村は、彼より一つ年上の四十三になる。彼が定時制にかわつてから、めつたに三村に会うこともない。その三村に、「お前はまだ若い」と言われる時、彼はからかわれ

ているような気持ちになる。

三村は、彼より一つ年上だが、まだ頭髪など黒く房々していて、顔には皺もない。三十四、五の若さに見える。その三村が、どうしたのかこの所元気がなく、華奢な肩を落して極端に背中を丸めている。

夜の十時、バスを降りた彼は、そんな三村が吹きさらしの小さなベンチに靠れているのに気付いた。三村は軽く右手を上げて彼を迎えた。

「ちよっと付き合わないか」と三村は言った。ふっと会いたくなつたんだ。もう帰る頃かと思つてね」いかにも三村らしかった。

いつもの焼鳥屋の止り木に腰掛けて、二人は酒を飲んだ。

「いいことは何もない。やたらと気が滅入つてしようがないんだ」と三村は、吐きすてるようにそう言った。

「そう思えば、益々そうなる」と宥めるように言いながら、彼も、何も目先の變つた好ましい話題がある訳ではなかつた。

「子供が大きくなるつて、いやなことだな」ともう目の縁を赤くした三村が、いつもの三村に似ず、自分の子供のことを愚痴っぽい口調で話した。

三村のたつた一人の男の子は、もう高校三年生になるのだが、進学にも就職にも身を入れず、「詩人になるんだ」と齒の浮くようなことを言つて、無断欠席したり、喫茶店にも出入りし、女友達のことでは学校から再三注意を受けているのだという。「おやじの遺伝かな」とひとごとのように男の子は言う。優柔不断な三村の性格を非難する妻の口調なのだ。

「オレの場合、教員であることが、かえつて子供には悪いみたいだ。オレはこう

見えても、心の中はやさしくてひどく純粹なんだが……」

彼と同じく海軍に行っていた三村は、酔つてくるとしきりにオレ、ということばを使う。

「オレが音楽にかけようとする、純粹な情熱まで、子供を見ていると規制されるみたいな気がする。オレらしい夢を、一つ一つはぎ取つてゆく」

彼には、三村の気持が分るような気がする。同じように芸術に志はあるのだが、どちらかといえば、二人ともひどくストイックなたちなのだ。それが何となく二人を唯一の親友と思わせているのだから。戦前派のようなおおらかさもなく、戦後派のような割り切り方もオレにはできない、と沼田も思う。ふとしたことで自虐的になり陰気でひねくれた所がある。そのくせ、根はやさしくて純粹なんだと思つている。そんな自分を信じ、

いたわつて生きるよりほかに、自分を生かすてだてはないように思つている。三村が、そんな自分の子供のことで、家らしい積極的な姿勢を取ることでもできず、自虐的になる気持が、彼には分るような気がする。が、それがいいと思つているのではない。

「時代だからね。オレたちが、自分を純粹だと思つていること自体、ひどく滑稽なことなのかも知れない。子供だつて、きつと純粹なんだよ、清潔なんだよ、オレたち以上に」と彼は言った。

「それはそうかも知れないが……オレには、とても……」と三村は、いかにも音楽家らしく、ピアノの鍵盤にたえて自嘲的に呟いた。

「一つ一つ、オレの鍵盤がもぎ取られてゆくみたいなんだ。変調をきたし、ガタガタになり、やがて鍵盤のないピアノの抜け殻が、そこに転がされている。そん

な自分にゾツとすることがあるんだ。子供は、オレから取り上げたそんな鍵盤を、怒ってどこかへ投げ棄てたり、無意味な勲章みたいにベタベタ体へぶら下げたりして歩きまわっているんだ。そんな時オレは、自分の今考えたりしたりしていることの意味が、ふっとわからなくなることもある。オレの私生活にまで、いちいち文句を言うしね……」

そんな三村の妙に深刻な顔を見ながら、情けないやつだどつくづくどそう思う。そう思いながら、やはり自分もそうなのかも知れぬ、と思う。まだ子供は小さいが、三村のようになる可能性は十分ある。こんな生活をつづけていると……。

「ところで」と三村が言った。「江波が死んだよ」

「江波が……?」と愕いて彼は言い、つい五ヶ月ほど前に、やはり三村とこの

止り木で酒を飲んだ江波という男の顔を思い浮べた。

長髪をオールバックにし、彫りの深い外人のような顔立ちだが、口を開いた顔は意外にあどけなく、二枚の大きな門歯がひらひらして見え、ふと、腹話術の人の形のように、と彼は思った。その顔が、目を閉じた土け色の死人の顔になり、彼の目の中で、二枚の門歯がひらひらと拡大された。彼は嫌な気がして、口に含んだ酒をうつむいて土間に流した。

その日は偶然、江波と連れ立った三村に会って、この焼鳥屋に入ったのだった。小さな楽器店を経営しながらY市合唱団の指揮者として、最近県下で著名な活躍をしている江波という男に、彼はその時はじめて会った。

いかにもラジカルな音楽家らしい、気迫のある話題や話しぶりに、彼も三村も殆ど聞き役に回されてしまった。三村は、

その江波という男と、地方の音楽運動に活を入れようともくろんでいたようだった。

「肺ガンだった。お前もタバコには気をつけた方がいい」と三村が言った。三村は酒は好きだがタバコは吸わない。「お前に会ってから間もなく、たった一十月の患いだった」

三村は口を歪めてそう言い、ペツと土間に唾を吐いた。「四十五才だったか……」と彼は言った。「もう長くはないな」と三村が言ったのはその時だ。ほんとうにもう、長くはないのかも知れぬ。

彼は階段を下り、便所への長い廊下をゆっくりと歩いた。歩きながら、四十六で死んだ彼の父のことを思い出していた。父が若死にしたとは思えなかったが、

死んだ江波という男と同じ年頃だったのだ。その時彼は十三才だった。ほぼ、今の息子の年令だ。

老朽した廊下が、足を運ぶごとに、弱い悲鳴に似た音を立てる。妻がふと目覚めて、そんな彼の足音をじつと聞いているのかも知れぬ。

廊下は、妻の寝ている部屋の前で行きどまりになり、それから不必要に迂回したコの字型の渡り廊下で、母屋の方に通じている。母屋では、もう七十になった彼の母が、一人で住んでいる。彼は、便所へ立ったついでに、早い時間であれば母に声を掛けることもある。が、今はそんな時刻ではない。廊下の軋みを気にしながら、彼はゆっくりと廊下を歩いていった。そのコの字型廊下の懐の部分に、小さいが妙に凝った作りの便所が建っている。

彼は、便所の作りに凝った父のことを、

時に考えることがある。

父はいくつかの事業に手を出したが、結局ものになつたものは何もなく、ただ浮世絵の収集マニヤとして、この田舎町では一風變つた人間として僅かに認められていたようだ。そんなブローカーのようなことで、時にかんりの大金を持ったりもしたに違いない。

沼田の幼い記憶の中に、のっぺりとした白い顔で、いつも驚いたような目の色をして、彼のほうを見詰めていた断髪の女の顔が浮んでくる。

その女は、時にハイカラな洋服を着てネックレースを掛け、黒革の大きな鞆を下げて父と一緒に家を出た。が一人では殆ど外出せず、今妻が寝ている部屋を自分の部屋にして、監禁されたように、いつもじっと坐っていた。時に廊下に出て庭の方をぼんやり眺めていることもあり、ひっそりした足取りで庭の植込みの

中を横切り、母屋の小縁からスツと便所の中へ消えていったりした。彼は、あんな人形のような女でも便所へ行くのかと、不思議な気持で眺めていた記憶がある。

父はその頃、彼と母のいる母屋の方には殆ど顔を見せず、彼の今いる二階の部屋を仕事場にして、自分でも美人画の版画を彫ったりもしていたようだ。その女の人を父は「モデルさん」と呼んで、彼にもそう言わせた。父がコの字型の渡り廊下を作り、妙に凝つた便所を作つたのはその頃のことだ。もう三十年以上の昔になる。

便所の中には、ある位置から天井を仰ぐと、光線の工合で額縁の中に美人画が浮き出してきたり、壁に浮世絵の版画がはめ込まれていたりした。便所という陰湿な所を、そんな趣味で飾つた父の心情を、彼は理解できないものに思つてきた。

モデルさんのこともそうだ。が、この頃沼田は、自分が三十年前の父に似てきたのではないか、と思うことがある。父の写真など改めて見ようとも思わないが、三十年前の父は、ほぼ彼と同じ年齢だった筈だ。案外彼と同じ顔つきをして、夜おそくまで一人机に向い、版画の構想など練っていたのかも知れぬ。母は幼い彼にくどくどと父の悪口を言っけて聞かせ、父に愛されたという記憶もないが、今彼の息子も、彼が愛しているとは思っていないかも知れぬ。彼の隣の部屋で、謔言を言いながら眠っている息子が、三十年前の自分の姿に重なってくる――。

父は、彼が中学二年の夏に死んだ。父の死顔は殆ど覚えていないが、案外賑やかだった葬式の日の記憶は鮮かだ。腹を病んで死んだというのだが、今でいえば江波のように、ガンというものだったかも知れぬ。

彼は、だらしなく弧を描いて落ちる自分の尿をぼんやりと見ながら、昔のそんなことを思い出していた。便所の作りはそのままで、天井の美人画も壁の版画も取り払われ、そこにはもう父の俤はない。

歩くごとに廊下が軋む。彼は、自分が三十年前の父になったような錯覚をおぼえて、ふと立ちどまった。妻の部屋の前だ。耳を澄ますと、微かな妻の寝息が聞える。まだ目の縁に、涙のあとがかわのように貼りついているのかも知れぬ。

彼は障子に手を掛けてしばらくそこに立ち止まり、部屋の中に入ろうかと迷った。泣きながら眠った妻のことが、今ではかわいそうな気持ちになっている。妻とのことはもう、いつから……、と記憶の中で薄れるほどになっている。そのことに彼は改めて気付いた。入ろうか……、それは一つの決断のよう

なものだ。障子を開けると、いやおうなしに夫の立場に立たされてしまいそうだ。誰のせいでもない、自分のせいなのだ。そんな自分を疎ましく思う気持ちがある。喜びというよりは、それは全く緩慢で義務的な行為の一つに過ぎないのだ、と彼は思う。

父にもこんな迷いがあつたのだろうか。父の場合それは、迷いというよりは、もつと苦い何かの感情ではなかつたろうか。

便所の中で、長い時間をかけて放尿する。タバコなどふかしながら、しばらく天井の美人画や壁の版画を眺めている。便所を出る。廊下に立って、母屋の方と部屋の方を、父はしばらく交互に眺める。母屋では、妻と子供が眠っている。母屋の方へ行くことは全くなされた。父は夜の長い廊下を一人で帰る。部屋の前に立つ。中ではモデルさんが眠っている。障子に

手を掛けて、しばらくためらう。そして父は、今の沼田のように廊下を軋ませながら、一人二階の部屋へ帰ることが多い。コの字型の長い廊下を作り、便所を飾つた父のほんとうの気持が、なぜか、今の彼にはわかる気がする。それは多分、夜の孤独な自分に向き合つてすこす習性を覚えた者のみの持つ、特殊で偏狭な心情なのだろう。

事実は、全くそうではないかも知れぬが、彼の年頃だった筈の晩年の父が、何を思っていたか、今の沼田にはわかるような気がするのだ。しかし、彼は、父のような、そんな酒脱な生き方はできそうもない。

彼は、妻の部屋の前をゆっくりと離れ、長い廊下を歩き、階段を踏んで二階の部屋に入った。

時計を見ると三時。眠らなければ、と思いつながら眠くはない。Eの小説を読む

のも、もう面倒な気持になつてゐる。

彼は部屋の中に立つて、両手を差し上げ、軽く体操のまねごとをした。不自然に体が硬直するような気がするからだ。昔のようにキビキビとはゆかぬ。上に挙げたつもり腕が、だらしなく頭の上に乗がつている。スタンドの明りで、そんなおどけた自分の姿が、壁に不分明な模様を描いている。

「その手は何だ！」

不意にピシツと音がして、背後から彼の腕が叩き落とされる。

「館砲精神を叩き込んでやる！」

声と同時に両腕が取られ、沼田は列外に引き出される。区隊全員の注視の中で、彼は右と左から、何十回かビンタを食わされる。股を開き、歯を食いしばり、目を据えて、彼は「八ツ、九ツ……」と

数えている。が、その数も不確かになり、彼は昏倒する。そんなことが、二度や三度ではなかつた。それに類したことは、殆ど彼の日常でさえあつた。彼は今も頬に手を触れる時、そんな殴打の感触が蘇ることがある。が、それは隔絶された世界のように、ひどく現実感がない。おどとした日常の中で、妻に手を掛けたことは一度もなく、「すまない」と低い声で呟いている。館山海軍砲術学校——海軍予備学生——そんな青年のころがあつたということが、自分でも信じられない気持がする。あれからもう二十年もたつたのだ、と彼は思う。そして彼は年を取り、怠惰になり、「もう長くはないな」と呟き、徒らに妻を泣かせ、藁しべをいぶすような張りのない毎日をすごしている。沼田は自分でそんな自分の頬を殴りつけたことがある。

彼はまた机の前に坐り、手帖を取り上げてパラパラとページを繰った。

十一月×日のところ「誕生日」と書いた薄い鉛筆の跡が目にはいる。忘れるところだった、という妙に新鮮な思いが、今ではもう厄介だなどという気持になっている。

木曜日の夜は、四時間の授業がつまっている。何とか理由をつければ、早く切り上げられないことはない。たまに、誕生日ぐらい、人並みに子供と一緒に夕食をとるのもいいではないか、とも思う。が、今更誕生日などということが、彼の場合おかしいことなのだ。中途半端な年令で、それは祝というよりは墓穴を掘る思いに近い。それはそうなのだ、が、それも一種の解毒作用になるかも知れぬ。三村の言ったように「何もいいこと」はないのである。

「そう思えば益々そうなる」と沼田は有め顔でそう言った。それはことばの弾みで、本当にそう思っていたかは怪しい。が、何もないことがないのであれば、なまじつか、何もうじうじと考え込むこともないではないか。華やかにパツとやればいいのだ。それを単純と笑うことはできない。単純なものの中に、無理に複雑な意味を探ろうと焦ることもないではないか。どだい錯雑したものを洗練し、シンプルにする、それこそ酒脱というものだ。

「バースデーだよ、あさって」

やがて夜が明けたら、オレは少し気取って早速妻にこう言おう。オレは優秀な英語の教師なのだから。酒脱に高飛車にサツと出るのだ。何のことかと妻がとまどうのがおかしい。

「バースデー、誕生日だよ、ぼくの」

「あ、そうだったわね！」と妻が、重大

な失策をしていたように顔を赤らめる。

「うっかり忘れるところだったわ。じゃ、早く帰ってくれるんでしょうね。子供と一緒に……」

「ハッハッハ」と彼は優雅に、そして力強く笑う。

「勿論だよ。そんなことは訳はない」

「もう四十二ね、あなたも。お互いに、年を取ってしまったわ」

妻は、彼の顔を頼もしげに見上げて言う。

「何、まだまだ若いよ。これからだよ。だから豪勢にやりたいんだ、今年は。三村たちも呼ぼう。夜の授業なんて、一日ぐらい休んだっていいんだから。いわゆる厄年だしね」

彼はことばだけは豪勢に言っつて、いちいちのプランについては、妻と細かい相談をする。いわゆる豪勢にやれる身分ではないのだ。プレゼントなど形式的なこ

とは止そう、と彼は言う。が、妻はひそかに、かつて彼にネクタイをおくった位のかわいい企みはするかも知れぬ。

その夜、早く授業を切り上げた彼は、三村やその他二三の親友を連れ、チカチカ晴れた十一月はじめの星空の下を賑やかに談笑しながら帰ってくる。母屋にも便所にも、二階の彼の部屋にも煌々と明りがついている。ガストーブが燃えて、部屋を暖めている。

妻が、豪華な（といっても大した料理もついてはいないが）祝膳をこしらえ、妻も息子も彼の母も、彼らの帰りを待っている。

「誕生日、おめでとう」「おめでとう」パチパチと拍手が湧き、口々に心のもった祝福を彼は受ける。

「どうも、ありがとう」

彼は、低いしつかりした声で礼を言う。彼の心の幽暗の中に、小さな明りがつ

いている。彼の声は、その明りに向つて一つの決意なのだ、と沼田は思う。

赤いローソクに灯をともしたデコレーションケーキを囲んで、賑やかに話が弾む。

みんな四十前後の働き盛りなのだ。家庭のことや職場の話題―。彼らは、何となく芸術家風だが、政治や経済、科学などにも仲々くわしい。

息子を寝かしつけた妻が、にこやかな顔で酒をついでまわり、夜遅くまで親友たちは帰ろうとしない。

沼田の目の中に、そんな光景が浮んでくる。

それは夢ではない気がする。すぐそこに、手の届くところにそれはありそうだが、そうさせない何かがある。それは一体、何なのだろう……。

死んだ江波という男の、ひらひらした門歯が彼の目の中にある。三村も、変に

くたびれた元気のない顔をしているし、おいそれと気楽に来てくれそうな親友も、彼にはいない。そんなのが、やはりオレの、がらに合った生活というやつなのか……。目の縁に涙の跡を貼りつけたまま、一人で眠っている妻の顔が浮んでくる。

彼は手帖を閉じて、ポイと机の上に投げた。

「誕生日だよ、あさって」というのはやはり止そう、と彼は思う。